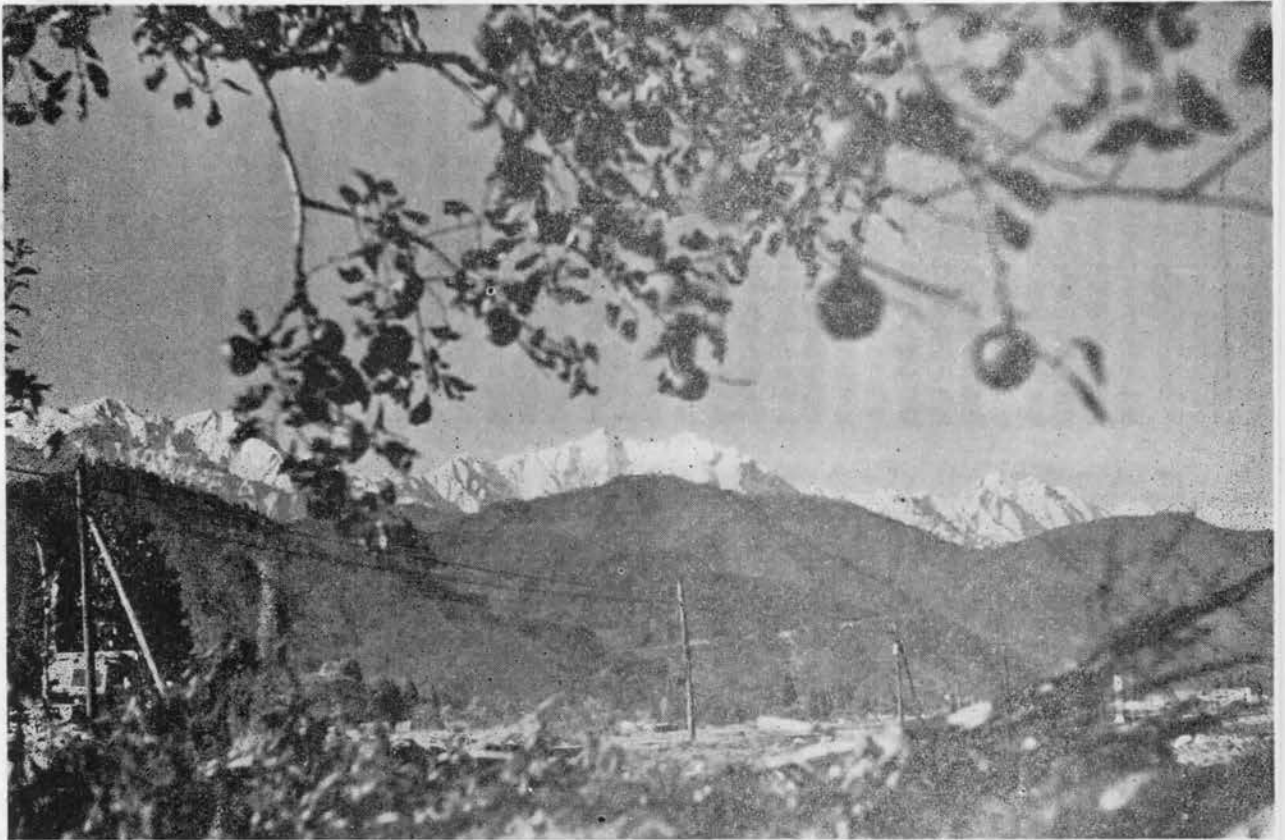


山と博物館

第11巻 第11号 1966年11月25日 大町山岳博物館



ライチョウの遭難

鹿島槍ガ岳に源流を求める鹿島川の川原に
近い二ツ屋地籍にライチョウが現れた事実も
この現象の一つである。

後立山連峯の山頂が連日はげしい吹雪にお
おわれ、山肌の白さが日毎に増していた十一
月三日の夕暗、川原に接する原野や畦畑の一
帯で餌を探していた猫が一羽のライチョウを
くわえてきた。この猫は長沢信さんの飼猫で
今春生まれた雌猫である。ライチョウは雄で
頭部と背部の一部に褐色の夏羽を残す他は純
白の冬羽におおわれた成鳥であった。

本来ならば標高二四〇〇以上の高山帯に
生活圏をもつライチョウが、たとえ彼等の生
活域である山岳に接した山麓であるとはいえ
標高八二五前後の地域になぜ現れたのであ
ろうか。捕えられた時刻は丁度ねぐら入り前
後であったためか、食べたばかりのシロツメ
クサ、イブキジャコウソウなど山麓の植物で
素のうが満たんにされていた。

防御力を持たない彼等は、高山生息地では
キツネ、イヌワシなど天的からの逃避のため
に驚くほどの鋭い感覚を持ち、ねぐら場所な
ども実に合理的で安全な所を選ぶ先天的な能
力を備え、高山に適應した生態を持つ鳥であ
る。捕えられたライチョウは全く経験のない
異質な環境に現れたために、無残にも春仔の
猫によって命を落したものであろう。

ライチョウが住んで居た場所と考えられる
鹿島槍ガ岳では、愛知大学生が疲労凍死する
という冬山遭難が発生し始めた。登山行為は
単的に伝え、低地に活動圏をもつ我々人間
が高山帯まで活動圏を広げる行為であると云
えよう。遭難防止のためには、経験、天候、
技術、装備など各種の要因があげられている
。もちろんこれらの点に万全の備えが必要で
ある。しかし、自然には人間の知識や能力を
越えた何ものかがあることを絶えず念頭に置
き、自然に対する敬けんな気持をきつ者でな
とい登山する資格が無いと断言できよう。

平 林 国 男

再び巣箱の観察について

三石 紘

はじめに

本誌第十一巻第二号で、私は伊那里の山林に架設した巣箱について、鳥類(スズメ、シジュウカラ、ヤマガラ)の蕃殖状況と、ヤマガラの蕃殖期の生態について報告した。しかし枚数の関係で、再営巣、就時、ネズミ類の利用など、巣箱に関する興味ある問題をはぶいてしまったので、ここに報告する次第である。四季の生物に関してすばらしい観察眼で味わい深い文章をいつも書く荒垣秀雄さんは週刊朝日「季節の余白」(一九六六年八月二十六日号)で巣箱の起源について次のようにシジュウカラの就時

シジュウカラの就時



記している。「今から六十年ばかり前の一九〇四年の夏、ドイツに葉巻虫が大量発生して森林が丸裸になったことがある。その時、ベルレブシニ男爵の所有林とその付近だけが、虫害からまぬがれた。彼はその数年前から四百エーカーの森に二千個の巣箱を設け、そこに野鳥が住みついて大繁殖していた。その鳥たちが葉巻蛾を捕食していたので、害虫の発生をおさえ、森の緑が助かったのである。これが巣箱というものの起りで、野鳥の増殖と虫害防除に大きな効果のあることが認められ、巣箱による鳥の住宅政策が世界じゅうにひろまった。日本に巣箱を初めて紹介したのは鳥博士の内田清之助氏だそう、ベルレブシニを訪ねて巣箱の森を実地に見学された。大正五年に盛岡高等農林学校が初めて架設してから各地にひろがり、農林省がとりあげて全国に組織的に巣箱運動を展開したのが大正十三年だった。……少々長い引用だがこの文章で巣箱の起源と日本での普及の事情が明らかと思う。要するに巣箱は本来は森林害虫を防除するため鳥類を増殖するのが目的であった訳だ。その後農業が普及し、空中防除が行われるようになって一時はすばらしい効果があるかのようにみえたが、種々の弊害が現れ、再び害虫の天敵である鳥類の役割が認識され、当然の結果として巣箱の架設が重視されてきた。しかしこのような森林保全のためばかりでなく、人工的に動物に巣を与えその利用状況を観察するというのも、それのみで大変興味あることである。

一、ヤマガラの再営巣

再営巣とは巣箱での営巣がなんらかの理由で中断され、再び他の巣箱でその番によって

利用される事実をいう。この事実は、鳥の足にカラーリングをとりつけ、個体識別しておくことにより、監視すれば明らかになる。ヤマガラは、抱卵中、ふたを開いても、箱を木から地上に下ろしても、又極端な場合はカメラをむけてフラッシュをたいても、時期によっては飛び立たず、じっとうずくまっているほど巣卵に対して執着心のつよい鳥であるが、その反面、なにかのきっかけで簡単に営巣を中止する性質が強い。一九六五年のデータでは約八十パーセントが営巣中止している。そして中止した番のいくつかは、そのまま蕃殖を終るのでなしに、また近くの巣箱に新たに巣材を運び産卵するのである。再営巣の巣箱の位置は多くの場合、その番の行動圏内であって、他の番のテリトリーの内や、テリトリーをとびこえてしまうことはない。だから抱卵中止した巣箱ができると、(営巣から育雛までの蕃殖期のうち、番が巣を築ける率が多くなる)抱卵中である。この理由による第一に観察者の接近しすぎが考えられるが、そればかりとも云いきれぬ事実があり、まだ原因ははっきりしていない。一週間ぐらいたして、その巣のまわりの空だった巣箱を入念に観察していると、みおぼえのあるリングをつけたヤマガラがコケをくわえ込んでいるのに出あうことができる訳である。一シーズンで二回まで、二回目が中断すると、もうそのシーズンの営巣活動は普通みることはできない。なお二ヶ年間に四回、つまり二シーズンつづけて再営巣した例が二番ある。

鳥の行動圏は我々が想像するよりかなり小さなものである。羽根が自由自由に大空を飛翔出来るのだから……と考えがちだが、この例では直径千メートル以内)大きく見ても……)の林で周年生活していることになる。

次に放置された巣箱(多くは抱卵中止)にすぐ他の番が巣材をくわえ込み、産卵するという例もみられた。こんな例は特に巣箱を密集架設した地域に多い。古い卵と新しい卵が

二重にコケでつまれている訳だ。抱卵放棄の巣の卵を他の抱卵中の卵と一緒にする実験もころみみたが、古いためか孵化に成功したものはなかった。種類によって営巣中止率は異なり、ヤマガラよりシジュウカラの方が少ないことも明らかにした。

二、シジュウカラの就時

本誌第十一巻第三号に佐野昌男氏がスズメの就時個体数の変動について書いている。それによるとスズメは、夏から秋にかけては、樹木に冬は主に建築物に就時するそうである。鳥類の就時行動は個体群生態学上興味ある研究テーマ(たとえば就時数からその地域の個体数や死亡率が明らかになる)なので、多くの種で研究がころみられている。以前本誌でも山岸哲氏がカラスの例を書いている。シジュウカラについては現存英国のエドワード鳥類研究所のラック博士の下で同種の研究をしている蠟山朋雄氏と山階鳥類研究所の浦本昌紀氏が東京の武蔵陵墓地で就時の研究をくわしくした。私は伊那谷の巣箱では継続的な研究をしたわけではないが、秋から冬に、よく巣箱に眠っているシジュウカラを見たり、写真にも撮った。(写真一)は巣箱に就時しているシジュウカラを夜中にストロボをたいて撮ったものである。懐中電燈でまともに照らすと、飛び立ってしまうので、あらかじめピントをあわせ、ストロボをセットしたカメラのレンズの横に棒をしばりつけ、その棒の先が巣箱の底についたとき、ちょうどピントが合致するように工夫し、シジュウカラが就時している巣箱をみつつけ、そっと木からはずして地面に下ろし、片手でカメラをむけ、他方でふたを開き、シャッターを切るといふかなり複雑な作業によって生れたのがこの写真である。就時時間は季節や日照状態などの違いで当然ちがってくるが、十二月頃は午後の五時半前後が普通である。なかにはまだ充分明るい午後三時五十分すでに箱内に入らずくまっていた個体もみられた。就時する巣箱は個体

によってほぎまわっているようで、ある特定の箱にいつも同じリングの個体が数回観察されたことがある。又、利用度の高い箱は内部に糞がうずたかくたまるのですぐわかる。この糞の量から、架設地域の就時数や時としての利用度が明らかになると思われるが、まだ野帳を整理してないのでなんとも云えない。なおシジュウカラ以外の鳥の就時は同地域では一度も観察されなかった。特にヤマガラは就時を期待したのだが、どういう訳か、昼間はこの地域に常棲しているのに就時は認められなかった。

三、ネズミ類の蕃殖

鳥の蕃殖が終りに近づいた頃、巣箱を巡視して、おもしろい事実気付いた。それは、箱いっぱい木の葉がなにかによって入れられていることであつた。はじめは子供のいたずらかと思つたが、そうではなくネズミのしわざだつた。中に手を入れて葉を取り出すとした時、小型のネズミが飛び出したので明らかになつたのだ。そこで木の葉を注意深くとりのぞいていくと、底面に丸く葉を重ねた産座があり、かわいらしい仔ネズミが数ヒキ丸まっていた。

その後も鳥の巣立ち箱を掃除しておくとして、ひんばんにネズミの蕃殖がみられた。信州大

ヒメネズミの引越し



学の宮尾嶽雄氏(本誌第十一巻第六号「トガリネズミ」の著者)に写真を送って同定していただいたところ、ヒメネズミのことだつた。宇田川寛男氏の「ネズミ」(中公新書)によるとヒメネズミの蕃殖は春秋二期、春は地下のトンネル内に、秋は広葉樹の茂みの中に枯葉を集めて丸い巣をつくることとであるが、巣箱を利用した十八例では六月中旬から十一月中旬まで続いて蕃殖がみられ、特に秋に多い。春は鳥が利用するために少ないのか、それとも秋だけ利用するのは明らかではない。

巣材として運び込む木の葉は、周囲にたくさんあるクヌギやクリ、コナラなどの生葉ですべて広葉樹のものである。枯葉より生葉が多いので、葉はジメジメしているようだが、実際は運んだ後かされてしまつたためか、産座でカサカサに乾燥している。巢中に仔がいた五例から仔の数を平均すると三・二児となるが、これではデーターが少ないので、これをもつてヒメネズミの仔数とすることは危険だろうが、この程度の仔を春秋の二回ふやされては森林を守るために架設した巣箱がかえって森林の害獣を生産することになる。そこで発見次第殺してしまつた訳だが、ある時、ネズミのおもしろい習性を観察出来たので少し書いてみる。それは「ネズミの引越し」とも呼べる生態で、次のようである。

私が巣箱をあけて木の葉がつまっているとネズミが入っているかもしれない、仔がいる場合は気が悪いので木の棒でそとをかきまわし、存在をたしかめる訳だが、親がいると必ずカサコソ音がして、すばやく逃げ出す。次に仔がいるかどうか葉を棒のハシで数枚づつとり出すのだが、ある箱で、この作業をしているとき、逃げ出した親ネズミが、私がい

の仔を移動させてしまつた。眼前の光景をじつと観察していた私は、なにか生物の本能の偉大さというやうなものに感動し、しばらくぼう然としていたことを今でもおぼえている。さて、このようにめずらしい行動であるから是非写真に撮っておこうと考えたのだが、その時はあとの祭であつた。そこで家に帰り再び附近の巣箱を巡って、仔がいない箱の前にカメラをセットした。親が逃げ出してから数時間後、再び親が木をスルスル登って穴から入つた。そこで私は少々オーバーに箱の中をついた。すると、前と同じ習性をこの親は示した。フラッシュの光に少しはおどろいたが、やはり全部の仔を箱から運び出し、木の下の穴にきえてしまつた。(写真二)このときの観察をまとめて「採集と飼育」28巻4号に報告したのでネズミに関心を持つ方には参考になるかと考へる。

野外においてネズミ類蕃殖生態を研究することは、鳥類に比較し、大変困難なことだと思つたが、巣箱を利用すればかなり成果があらるのでないだろうか。

四、巣箱と書

森林に巣箱をかけたばあ、いつでも目的と一致した効果があげられるとはかぎらない。かえつて森林に書をおよぼすこともある。その一つに観察のために幾度も林に入るの

、幼木が踏まれ枯れることがある。特に学校などでクラス全員で親に山へ入るようならば気がつけたものだ。

第二はせつかく巣箱に鳥が蕃殖しても、その卵や孵化した雛をとつたり、全滅させたりする例もある。これは直接の害とは云えぬかもしれないが、村落附近ではかなりある。とある。また撮影や雛の体重測定などのためにひんばんに巢に人間が接近すると蕃殖を中止する例もある。私もかなり気をつけたつもりだが、数羽の雛を撮影の時カメラを設置したため親鳥が育雛に通わなくなつて殺したことがある。いくら観察の為とはいへ、まずい



クツ鳥類に害された巣箱

ことであり、反省している。中西悟堂氏の「野鳥記」で、ヤマガラを飼うことが流行し、雛が高価で売買された昔、雛をとるために巣箱を大規模に架設した事実が指摘されているが、これなどは本末顛倒もはなはだしく、絶対にさげなければならぬことである。

反対に巣箱が害されることもある。主にケツ歯類のしわざで、ひどい時には箱が全部かじりつくされることもある。(写真三)この動物の種類は現在不明である。前述の宮尾さんに、かじられた木片を送つて同定していただくよう考へているがまだ実行していない。

五、山に巣箱を

山岳写真家で高山蝶の研究者として著名な田淵行男氏は以前の本誌で山頂のケルンの林立について警告を発しておられる。登頂記念にケルンを積んだり、月日や行く先を書いた木片を打ち込みたい気持はわかるが、その記念を巣箱にしたらどうだろうか。山腹の森林帯から数十歩踏み込んだ所にそつと架設するのなら、美をそこねることもないし、だれにも見つからず、こわされる心配もない。次の機会に利用しているかどうかのぞいてみるたとしても、充分に鳥たちは利用してくれるのである。(大町第一中学校教諭)

第11巻8号では山小屋及び登山路等の環境衛生面について大略を申しのべましたが、今回は山小屋二、三カ所の施設の監視成績を項目別にあげてみたいと思います。

一、環境衛生

- 1. ゴミ処理状況
 - イ・屋内
 - 良いもの 21
 - 悪いもの 1
 - ロ・屋外
 - 良いもの 2
 - 悪いもの 19
- 2. 飲料水の消毒状況
 - 完全消毒 11
 - 不完全消毒 8
 - 未消毒 3
- 3. ねずみ、はえの防除状況
 - 完全なもの 4
 - 不完全なもの 10
 - 無いもの 8
- 4. 屋内の清掃状況
 - 良いもの 17
 - 悪いもの 5
- 5. 下水の排水状況
 - 良いもの 8
 - 悪いもの 14

二、食品衛生

- 1. 食器具類消毒状況
 - 完全消毒 5
 - 不完全消毒 11
 - 未消毒 6
- 2. 調理室等手洗施設及び手指消毒設備
 - あるもの 7
 - 無いもの 15
- 3. 調理室の清潔状況
 - 良いもの 13



三、防疫

- 4. 調理室の防鼠防蠅施設状況
 - 良いもの 5
 - 悪いもの 17
- 5. 調理器具保管状況
 - あるもの 3
 - 無いもの 19
- 6. 食品庫の設置状況
 - あるもの 10
 - 無いもの 12

5. 便所消毒薬設置状況

- あるもの 19
- 無いもの 3
- 6. 水質検査成績
 - 実施数 26
 - 不適数 6
- 7. 大腸菌検出数
 - 3

以上山小屋の衛生状況として、監視成績を申し述べたわけですが、ここで今後の問題点として残るものは、登山路やキャン

完成されない

スキーの魅力

野 勝 直 久

プ場の衛生でありこれの清掃の責任が国にあるのか、市町村にあるのかは別として、お互いに前向きな姿勢でこれらの解決にあたなければならないと信じております。
(大町保健所)

初めてスキーというものを知ってから、早十数年の才月を数えます。そのスキーの歴のなかからスキーへの魅力は？、と問うと無限性と答えられます。それは完成されないスキー技術に對してあると感じるからです。
私は常にスキーは、理論の上に立って身体で体得していかねばならない、その為には数多くのスライドをする以外に方法はないと考えて来ました。このことについて間違いはなかったのですが、しかし、頭の中で描くスキーと、作り出され表現されるスキーには一定の間隔をおいて合点することがなく経験が重なるにつれ以前にも増してスキーが解体されていく様に感じられ、そして現在のスキーに於いても感じているのです。このアンパランスな現象に完成されないスキー技術の魅力がひめられていたのではないかと思うのです。ピヤン、クロード、キリーは、競技者としての立場から世界選手権後記者会見の席上「スキー競技は計り知れない魅力を持ち、そしてつきるところのない無限なものがあり、決して完全に達成されることのないものである。」と発したそうです。完成されないとは競技者(キリー)の場合、それはより速くスライドレゴールするスキー技術の方法に於いて興味があり、一般者ではスキーを表現する時「美」に對してのスキー技術に於いて意味があります。
ようするに競技者と一般者の立場に於ける

博物館だより

二ホンザル入園

紅葉もすっかり落ちた黒部ダムへの大町ルートで子ザルが一回保護された。
11月13日昼頃白沢地籍にたまたま居た、関西電力内新日本技術コンサルタントの猿田正さんが保護したもので籠川を渡ろうとしていた数頭のサル内の一頭が石の上から足をすべらせ転落、川に流されたのを追いかけて川から救い上げた時にはすっかり弱っていた。ただちに博物館に持ち込み手当をした結果元気を取りもどし、現在は元気にサル舎の中をとびまわっている。

表紙説明

新雪の北アルプス 撮影 唐木 専 爾

山と博物館 第11巻第11号

発行所 長野県大町市TFL(大町)二二一

印刷所 大町市下仲町 大糸タイムス印刷部